



「受刑者のその後」

高丘中学校 2年 奈良 ^{かける} 颯

刑を終えて出所した人は、一般的には社会から受け入れられにくいとニュースや本で見たことがあります。日本では刑を終えて出所した人のおよそ2人に1人が再び犯罪を起こしているそうです。その理由として、再就職のしにくさなどの、出所後の生きづらさが関係してることがあります。一度罪を犯してしまうと、出所しても社会的に良いサポートを受けることができない場合が多いからです。就職がしにくい、できない、家族との関係や周りとの関係が切れてしまい、生きることに必要な分のお金を稼ぐことができず、周りに頼る人もいなくなってしまうと、苦勞する人が多いです。もちろん罪を犯した本人も悪いですが、それでも人として、国民として生きていく権利があると僕は思います。この悪循環を繰り返さずに、出所後も自分らしく生活していくために、近年、支援施設やサポート企業などが増えてきているそうです。実際にニュースでも受け入れている企業の仕事の様子を見たことがあります。もし僕が一度罪を犯してしまい、受刑し、出所した後、家族や周りとの関係が切れてしまったり、仕事ができなくなってしまったら、生活することができずに、もし悪気がなかったとしても生きるためにもう一度罪を犯してしまうかもしれません。ですが、そのような施設やサポートがあれば頼ることができます。このような施設が増え、認知度が高まっていくことによって、再犯率も低くなっていくと思います。

それに加えて、近年、刑務所内で作業として作った製品を売ることがあります。例えば、横須賀刑務所では、「ブルースティック」という名前の固形石鹼が売られています。僕の家にも一つ置いてあります。初めて使ったときは、とてもきれいになって、品質の高さに驚きました。取り組み自体だけでなく、製品の品質に対する良い評判を受刑者

の方たちに届けることができれば、モチベーションが上がったり、仕事のやりがいを感じるができると思います。こんな事業をきっかけに自分の犯した罪に対する後悔や、これからの人生に対する希望も生まれてくるかもしれません。

ほかにノルウェーでは、開放型刑務所とって、高い塀に囲まれた刑務所と違い、料理や掃除洗濯を自分で行い、自立した生活を送れるような環境が用意されている刑務所があるそうです。様々な取り組みを参考にして、新しい支援の仕方を考えていくのも良いと思います。

刑を終えて出所した人へは、施設を運営していなくても、会社を経営していなくても、僕のような一般人でも、受刑者の方が作った製品を買ったり、評判を広めたりして支援をすることができます。「罪を犯した人を支援する」少し複雑なことです、一人一人が助け合って社会での孤立を減らして、再犯率を低くしていくことによって、明るい未来にしていくことができると思います。

もちろん罪の内容によって、受ける罪の重さは変わります。ですが、罪の重さは違っても、一度罪を犯したという事実は変わりません。ですが僕は、刑を終えて出所し、心を入れ替えたからこそ、再就職や衣食住のサポートなどの社会の取り組みが増えて、刑を終えて出所した人に対する理解が深まって、もう一度仕事に打ち込んだり、仲間と助け合ったり協力すること、生活することの幸せに気づいてほしいと思います。そして、そのためには僕たち一人一人の支援が必要です。まずは、出所者への偏った偏見をなくしていくことが第一歩だと僕は思います。